

〈資料〉

音楽学習教材における一考察

— 音楽学習者のための楽典の教材に着目して —

前田 菜月
(人間学部子ども学科)

A Study of Music Learning Materials — Focusing on the learning materials for music learners psychology —

Natsuki MAEDA
(Department of Child Studies, Faculty of Human Sciences)

本研究は、保育士・幼稚園教諭養成課程の学生のための音楽実技演奏の助けとなる簡単な音楽理論、楽典の学習教材作成と学習カリキュラム研究のため、一般的な習い事や音楽専門家のために出版された日本の楽典の音楽学習教材について調査し考察したものである。

日本で市販されている数多くの音楽学習教材は全く同じ音楽理論を元に、導入として容易に理解できる教材から専門性を高める教材など各々の目的に合わせて数多く幅広く出版されている。その中から任意の出版社の楽典の教材を選び、内容や設問量の比率、特徴などを調査し、そして指導のねらい、方向性や傾向について論じた。さらにどの出版社にも、共通した特徴や一貫性が見え、今回調査の教材の全体の傾向が見つかった。そこから日本の音楽学習指導の考え方の方向性や傾向、ねらい、音楽における考え方について論じ、今後の教材作成、指導について考察した。

キーワード：音楽学習教材／楽典／音楽実技／音楽教育／保育者養成

はじめに

大学の保育士・幼稚園教諭養成課程の学生のための授業科目の中には音楽実技があり、本学の子ども学科も必修科目として音楽実技の授業が行われている。学生はピアノ実技演奏、声楽、合奏などの実技の技術や音楽理論などの専門性の高い知識を学んでいる。

ピアノなどの習い事や学校での課外活動において音楽経験が豊富で音楽の授業内容をはるかに越える理解力を持つ学生や、それまでの学校の音楽の必修授業以外では音楽経験がほとんどなく、長い期間音楽を能動的に経験する事から離れていた学生が同じ

授業を受ける。学生の音楽能力には幅広い差があり、授業は非常に専門性の高い内容である。読譜能力における実態調査を行い、指導者は限られた時間の実技指導の中でそれぞれの学生の能力にあった決め細やかな授業を行わなければならないことがわかった(小林、前田 2012)。その後、筆者は、それぞれの学生のレベルにあった弱点をカバーするための指導法の提案の一部として、自主的に学生が学習でき、さらに授業内容にも沿った基礎からの音楽理論を含む学習教材の作成と研究を行っている。

本研究はその一環として、楽器の演奏などの音楽の演奏実技の習い事や専門家が音楽の知識を学ぶために使う音楽学習教材について着目し、その実態を

調査することとした。その結果から教材の音楽学習におけるねらいや、内容を載せる比率などから起こる傾向や特徴などの一貫性を捉える。日本の音楽学習指導の方向性やねらい、考え方に一貫性があるかないかを論じ、今後の授業における教材作成と指導について考察する。

1. 本研究の目的

筆者が担当している音楽実技の科目の中に、様々な楽器を使い、2人以上、20人ほどのグループなど様々な人数での合奏を45分間で行う授業がある。1年間ピアノ独奏や、声楽、音楽理論、子どもの歌に伴奏付けをする実技などを学んだ後の授業ではあるが、学生の音楽能力に大変な差がある。音楽能力に差のある学生が一緒に合奏をしても、それぞれが楽しんで、能動的に演奏に取り組める授業を理想としている。そのため音楽能力のレベルの底上げと維持を授業の中で音楽実技実習も含めて短時間で行わなければならない。音楽理論や知識について反復演習や実技内に組み込んだ学習をし、短い中で集中して学習し演奏に生かせる授業内容を常々考えている。

音楽演奏の専門家、専門に学ぶ学生、一般的な習い事として音楽を学んでいる人の場合、音楽に費やす時間のほぼ多くが実技演奏やその専門分野に集中するであろう。音楽演奏に欠かす事のできない理論と知識を学ぶ時間は専門家になれば長く費やすにしても、学生や、一般的な習い事の人多くは毎日の音楽学習のうちの短い時間で要領よく学習し集中的に学んでいるはずである。

多くの音楽理論の学習教材の中には様々なねらいと目的を持ったものが数多く出版されている。

先に述べたような音楽学習者を対象とした、音楽学習教材について調査することにより筆者の授業の学習教材の作成研究に役立つと考え、市販の音楽学習教材のうち、ドリルや設問のついた教材に着目し、調査を始めた。

2. 調査の方法

数多く市販されている音楽学習教材は全く同じ音楽理論を元に、専門性を高める教材から導入として

容易に理解できる教材など、各々の目的に合わせて幅広く出版されている。

音楽学習教材の出版状況は、学校外の音楽学習向けの出版の割合が少ない出版社や、専門性の高い教材のみ出版している社など出版社の運営によって出版状況が左右されている。そこで、音楽教材の出版状況より、いくつか観点を決め調査の教材を決める。次にその音楽教材の実態を調査し明確にし、各教材の学習のねらい、方向性や傾向について論じる。

(1) 音楽学習教材の出版状況

一般的な習い事を行う学習者から専門家までのいわゆる学校外の音楽学習向けの音楽理論や楽典¹の教材は、多くの楽譜出版社から様々な種類のものが出版されている。

現在、一般社団法人日本楽譜出版協会に所属する楽譜出版社は28社あり、ドリルなども含め音楽理論や楽典の音楽学習教材を最低1冊でも出版しているのは17社であった(表1)。

表1 ドリルも含んだ楽典の教材を販売している出版社

(株)エー・ティー・エヌ	(株)自由現代社
(株)音楽之友社	(株)春秋社
(株)学研プラス(音楽事業室)	(株)シンコーミュージック・エンタテイメント
カワイ出版	(株)全音楽譜出版社
(株)共同音楽出版社	(有)中央アート出版社
(有)ケイ・エム・ピー	(株)東音企画
(株)現代ギター社	(株)ドレミ楽譜出版社
(株)サーベル社	(株)日研(くおん出版)
(株)ヤマハミュージックメディア	

一般社団法人日本楽譜出版協会に所属する出版社のうち、音楽学習教材を一切出版していない11の出版社には、例えば、音楽科検定教科書を出版している出版社においては学校外の一般の音楽学習向けの音楽学習教材の出版をしていない。または楽譜のみ出版している。楽器を取扱いその楽器にそった楽譜のみの出版社、などがあつた。

音楽学習教材の出版が見られた、表1の17社の出版状況においても、学校外の音楽学習向けの出版の割合が少ない出版社や、数多くの音楽学習教材を出版しているが専門性の高い教材のみ出版している

など、出版社の運営の内容によって出版状況に偏りがあることがわかった。

例えば、音楽科検定教科書を出版している出版社においては学校外の音楽学習向けという音楽学習教材の種類が非常に少ない。ある楽器に特に集中した楽譜を出版している出版社は、音楽学習教材の出版数が少ない。強みである音楽ジャンルの対象がクラシック音楽以外の出版社は、そのジャンルに特化した音楽学習教材のため、一般的な音楽の楽典範囲を完全に網羅していない（これらの出版社はどちらかというと大人の初心者向けの楽器を演奏するための教材に力を入れている）。

またある出版社は非常に専門性の高い教材のみの出版に偏り、種類が非常に少ない。大人が子どもに指導する導入音楽学習教材に特化した出版社もある。運営の根本が楽譜ではなく、楽器、音楽団体、印刷、教育のための物品教材である出版社は、子どもの音楽学習導入時の教材においてのみ非常に豊富であった。クラシック音楽の楽譜の出版に長年携わってきた出版社は、楽譜以外は音楽関連の書籍に重きを置き、音楽学習教材をほとんど出版していない状況であった。

結果、初心者導入、専門家寄りの幅広い音楽学習教材を20冊以上出版している会社は28社中、7社であった（表2）。

表2 初心者導入、専門家寄りの幅広い音楽学習教材を20冊以上出版している会社

(株)音楽之友社	(株)東音企画
(株)学研プラス（音楽事業室）	(株)ヤマハミュージックメディア
(株)共同音楽出版社	(株)ドレミ楽譜出版社
(有)ケイ・エム・ピー	

この7社も音楽学習教材の出版物の量においては、例えば、ある学習レベルのみに特化し出版していたり、ある著者がメソッドとして考案した学習教材のみ出版しているなど、それぞれの出版社の運営の傾向によって異なっている。それぞれの学習対象レベルによる出版量に差はあるが、導入から専門的な学習者という幅広いレベルの教材を出版することと、大まかではあるが音楽学習導入レベルと専門性を高めるレベルの両方のレベルにおいて子ども

対象（教材の巻頭などに、それぞれ5,6歳から小学生高学年レベルを対象と明記され、なおかつわかりやすく大きな文字で書かれている、イラストが入っている等、幼児から小学生あたりのもの）と大人対象（対象と明記されていないが、明らかに文字が小さく多くの言葉によって説明されている、中学生あたりから大人まで）の両方の学習教材を出版している、という2つの共通点がある。

(2) 調査対象教材

今回の調査の対象にする音楽学習教材を選ぶにあたって、出来るだけ調査内容に公平性を持って調査したいため、以下の事を考慮し、表2に示した7つの出版社より音楽学習教材を選んだ。

①音楽学習教材の出版数が20冊を超え、ある程度豊富なこと、②一つの出版社の音楽学習導入時と専門性を高めるための教材の内容比較を行うため、両方のレベルの学習教材を出版している出版社の教材、③一つの出版社の音楽学習導入時と専門性を高めるための教材が一続きのシリーズになっていて、同じ出版意図で出版をされていないこと、④公平性のため、一つの出版社で音楽学習導入時と専門性を高めるための教材両方を出していないが、出版数が20冊を超えている出版社の教材、の4点である。

そこで、さらにこの7社から、ある学習レベルのみに特化した出版社とある著者が考案した学習教材のみ出版している2社を省いた。結果、この上記にあげた①②③に当てはまる、音楽学習教材の出版において何かに特化している出版社ではなく、初心者から専門家までの幅広いレベルでの音楽学習教材を数多く出版している7社のうちから4社と、また④に当てはまる、音楽学習導入時の子供向けの学習教材を目的に合わせシリーズ化して非常に数多く出版している1社の、計5社において教材を選び調査する事にした（表3）。

この5社のみとはいえ様々な豊富な音楽学習教材が出版されている。

比較調査には、1冊もしくは1つのシリーズに、ほぼある一定の音楽学習内容が掲載し出版されている教材を使いたい。そこでこの5社の音楽学習教材の中からの的確な調査が出来るものを探した。

表3 本研究で調査する教材

	教材名・著者	出版社
A1	ルンルン楽典ドリル 123 北村智恵 (2009)	(株)音楽之友社
A2	わかりやすい楽典〔問題集〕 川辺真 (2012)	(株)音楽之友社
B1	かいておぼえる音楽ドリル 佐野真澄 (2012)	(有) ケイ・エム・ピー
B2	楽典入門 坪野春枝 (2012)	(有) ケイ・エム・ピー
C1	週に1度のおんがくワーク上下 坂東貴余子、石川淑子、池田典子 (2012)	(株)ドレミ楽譜出版社
C2	ジュニアクラスの楽典問題集 森本郎、池田恭子 (2008)	(株)ドレミ楽譜出版社
D1	はじめての楽典ブック 長沼由美、二藤宏美 (2012)	(株)ヤマハミュージック メディア
D2	ジュニアの音楽ドリル 汐巻公子 (2012)	(株)ヤマハミュージック メディア
E1	新版おんがくドリル 234567 田丸信明 (1994)	(株)学研パブリッシング (現、学研プラス)

一般に音楽理論と呼ばれる内容の教材となると、簡単な1冊の書籍のようなものではなく、内容が多岐にわたり、その各内容において成り立ちから説明、実際の具体的な例など、詳細で膨大、高度で質の高い専門家のための学習教材となる。そのため音楽理論の教材は1冊もしくは1シリーズとなっていることはほとんどなく、様々な形で出版され比較には不向きである。また音楽ドリルのような教材は音楽の学習内容についての説明や記述がほとんどなく設問のみであったり、かいつまんで音楽学習内容をのせた教材や、内容を一部しか載せていない教材は学習内容に偏りがあり比較には不向きである。

楽典の教材ならば、音楽理論ほど詳細で膨大な量ではなく、音楽の演奏に必要な最低限の基本的知識を学べ、学習者の音楽に対する能力のレベルにおいて多くの教材が存在し、掲載している内容の単元はほぼ同じで内容を比較、調査しやすい。

前述した4社から音楽学習導入時の子供向けの学習教材と専門的な学習者のための中学生から大人向けの2種類の楽典の教材を選んだ。そして音楽学習導入時の子供向けの学習教材を目的に合わせシリーズ化して非常に数多く出版している1社から1種を、合計9種の楽典の教材を決めた。(表3)

タイトルには楽典とは入っていない教材もある

が、どれも楽典の内容をふまえた、なおかつ学習内容の説明と問題と両方が掲載されているものを比較している。比較する教材は次の通りである。

A から E の 1 にあたる教材が音楽学習導入時の子供向けの学習教材で、A から E の 2 にあたる教材が専門的に勉強する学習者のためのものである。C2、D2 はジュニアという教材名だが、内容は専門的に勉強する学習者向けの教材である。

(3) 教材を調査する内容と方法

調査対象教材において、調査をするにあたり、上記において選定した各教材において、まず掲載内容について比較する。掲載内容を比較した後、それぞれの教材比較のため、ほぼ全ての教材に掲載の多かった掲載内容の1つの単元について全体のページ数からの比率を調べる。また、ドリルのような内容確認の設問量も同じように全体のページ数からその比率を出し、それぞれの教材の傾向と特徴、他の教材との違いについて調査する。

3. それぞれの楽典の教材における内容

(1) 掲載内容

まず、それぞれの教材の掲載内容を調べた。ここで、掲載内容の「譜表と音名」「音符と休符」「リズムと拍子」「音階と調」において、単元を2つの内容を1つにして考えている。単独に分ける事も考えたが、内容に関連性が強く、出版物によってはそれぞれをからめて説明されているものもある。後述で掲載内容の比率を比較する際にも単独にして比較する事が不可能であったため本研究では2つで1つの単元として調査する。

まず、全ての教材に掲載されていたのは「譜表と音名」「音符と休符」「リズムと拍子」「音階と調」「楽語」であった。

その他、他の教材には掲載されているのに掲載のない内容、さらに掲載を足されていた内容についてまとめたものが表4である。

音楽学習導入時を対象としているB1とD1はほとんどの教材が掲載している和音、音程の内容が一切掲載されていなかった。

和音については導入のころに学ぶ、譜表や音名と

表 4 各楽典の学習教材の掲載内容

	掲載なし	掲載を足されているもの*
A1		形式
A2		コードネーム
B1	和音	指番号、楽器・作曲家解説
B2		対位法、楽式、 声乐、楽器、 作曲家年表、 コードネーム
C1		
C2		
D1	音程	
D2		鍵盤、指番号
E1		

※全ての教材に掲載されている「譜表と音名」「音符と休符」「リズムと拍子」「音程」「音階と調」「和音」「楽語」の上にさらに掲載を足されている内容

学ぶと混乱することもある。B1は導入時の学習教材として和音については掲載されておらず、代わりに他の内容掲載に力を入れているようだ。表4のB1の掲載内容がたされているものの欄より、指番号と楽器・作曲家解説が足されていることがわかる。指番号についてはとくに、初心者がピアノの演奏をする最初に知ることによってスムーズな演奏学習ができるようになるため、導入時に必要な内容である。楽器・作曲家解説も掲載によって興味を持って楽しく音楽を学習できるような配慮がみられ、どちらかというに興味を持たせる内容で読み物のように簡単にわかりやすく書かれている。

逆に、掲載内容がよりプラスされている教材が4種あり、A1、B1の学習導入時を対象としたほうは、A1の形式については、知りたい人だけ読むよう書かれており、なおかつ導入時の生徒が知っているよく知られた童謡を用いてわかりやすく説明している。先に書いたB1の指番号と楽器・作曲家解説と同じように内容を見ると、興味を持って楽しく音楽を学習できるよう配慮がみられ、どちらかというに興味を持たせる読み物のように簡単にわかりやすくかかれている。

A2、B2のほうは音楽理論にもつながる、導入時には知識を知らなくても演奏できる専門的な内容の掲載を足しており、音楽学習者にとってさらに広い知識を持ち、さらに高度な演奏に実用性の高い内容

である。先ほどのA1、B1のように興味をひく読み物といった内容ではなく、論理的に、説明はすでに多くの知識を身に付けていないと読み込めない高度な学習内容として掲載されている。

(2) 掲載内容の比率

単純ではあるが、一番わかりやすく明確なので、各教材の総ページに対しての掲載されたページ数の総合計の比率をだし、図1に表した。

この図1からわかるようにA1、B1、C1、E1の音楽学習導入時の子供向けの学習教材においては実技演奏する時に理解しなければならない「譜表と音名」「音符と休符」「リズムと拍子」に50%以上という、導入で最も必要となる部分に比重がかかっている事がよくわかる。C1、D1においてはその次に演奏の際に必要なとされる「音階と調」に比重が置かれている事も分かる。逆に、このカテゴリーの中で、実技演奏においてあまり必要とされない「音程」はどの導入時の教材も比重が軽くなっていることが分かる。

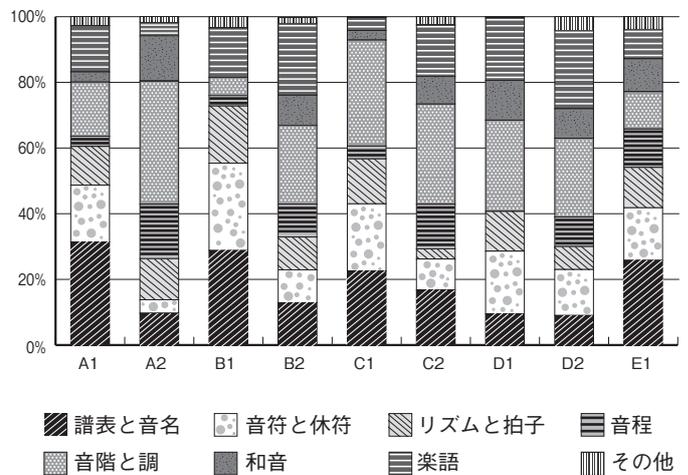


図1 学習内容の掲載の比率

専門的に勉強する学習者のための教材A2、B2、C2、D2を見ると、導入時とは逆に「音程」の比重が上がっており、また、「音階と調」「和音」「楽語」のような、演奏する際に譜面を読めるようになった後、表現のために内容を理解しながら演奏に反映させるものに比重が置かれている。

また導入、専門にかかわらず、C社とD社は「音階と調」については同じような比重になっている。

これは、導入でも、専門的にも必要性が高いと考えられたのであるだけで、やはり「リズムと拍子」「音程」欄をみると、明らかに導入と専門での学習内容を考え比重を変えている事がわかる。

(3) 問題量のその比率

次に表5の総ページ数、問題掲載ページとその割合についてみていきたい。

総ページ数についてはどの出版社も導入時の教材より、専門性の高い教材の方は格段にページが少ない事がわかる。表3の教材名からもわかるが、導入時の教材は2冊以上から成っているものが多い。これにより、同じ内容を繰り返し、多くのページを割いていることが分かる。

表5 問題掲載ページ数と割合

	総ページ数	設問掲載ページ数	設問掲載割合(%)
A1	127	25	19.6
A2	72	67	93
B1	218	149	68.3
B2	54	17	31.4
C1	102	85	83.3
C2	95	51	53.6
D1	155	13	11.3
D2	42	21	50
E1	348	236	67.8

次に問題ページ数とその割合を見てみると、2種類に分かれることが分かる。導入時の教材の方が問題のページ数の割合が多いのはB、Cで、A、Dは全く逆に専門性の高い教材に問題の割合が多い事が分かる。これについては、教材そのもののねらいより、導入時の学習、専門性の高さに関係ないことがわかる。

4. 今回の音楽教材の特徴と傾向

同じ楽典の内容が音楽学習教材の目的、ねらいにより特徴が定まり、内容載せる比率など、それぞれに傾向と特徴を持っていることが分かった。

それぞれの共通した特徴として、音楽学習導入時の学習教材の傾向として、演奏を行うためにまず必要な「譜表と音名」「音符と休符」「リズムと拍子」

に重点を置いていることが分かる。また導入時ということで、学習に時間がかげられることを想定して、全体のページ数を多くとり、反復する事により、知識の理解を深め、慣れさせるというねらいがわかった。

専門的な学習のための教材においては、内容が凝縮され、すでに理解や知っている知識も含め、集中して短期間で学習できることをねらいとし、専門性が高くなってから、演奏により表現の幅を広げるためにも必要な「音程」「音階と調」「和音」「楽語」に比重が置かれているという傾向が分かった。

またレベルに関係なく今回の音楽学習教材の特徴や傾向は大きく見ると共通した点があった。たいていの掲載されている順序がほぼ同じであった。これは音楽実技演奏を学ぶことを主体と考えた時にどうしてもこの順序で掲載するべき必要性があるということなのであろうか。

また、單元ごとに分かれて学習するようになっており、内容を絡めての学習や、実際の音楽の楽譜などを使った勉強をするような教材に当たらなかった。記述式の問題が多く論述式の問題が非常に少なかった。そのような点ではどの教材もとても似ているといえる。

おわりに

注目した音楽学習教材は、それぞれの特徴があったが目的とねらいがほぼ同じため、また選んだ規準を統一したため、前述のように大きな視点で見ると結果的に似た音楽学習教材になっているのかもしれない。

ねらいや目的が同じ方向でも、様々な理論を順序関係なく学んだり音楽にからめて具体的な楽曲と学ぶなど、全く違う教材であっても良いのではと感じた。

今後私の担当する授業内での音楽学習の教材や指導において、実技合奏に必要な音楽理論を、初歩的なことの復習と応用的な内容についての理解を深めるという目的と、なるべく短時間で集中的に理解するというねらいにとらわれすぎず、反復の学習を取り入れ、自由に実際の実技演奏、音楽作品などから実技と理論が混ざった学習ができるような教

材、学習内容の指導研究、実践をさらに深めていきたいと改めて考えた。

註

- 1 音楽に用いる音を楽譜などに作成するため、もしくは読むために必要な最低限の規則、またその規則を説明する理論。音楽理論との区別はあいまいだが、楽典は実際に楽譜を読むための基本的な知識といえる。

《参考文献》

- 小林恭子・前田菜月（2012）「読譜能力から見る音楽実技指導改善への一考察」『目白大学高等教育研究』Vol.18,pp.17-26
（受付日2016年10月31日、受理日2016年12月26日）